

早稲田大学大学院文学研究科

概 要 書

論 文 題 目

エジプト初期国家成立期における
石製容器生産の実態と支配戦略

申 請 者

竹野内 恵太

文学研究科人文科学専攻考古学コース

＜研究目的＞

本論は、エジプト初期王朝時代の石製容器生産メカニズムとその社会的意義・機能を明らかにするとともに、「なぜ石製容器が初期国家社会の形成・成立と歩調を合わせるように大量生産されたのか」について論じることが目的である。

石製容器の研究は、これまで器形分類や編年研究、産地同定などの基礎研究を経て、近年では工房址出土の製作道具や博物館資料の遺物観察によって製作技法の復元に目が向き始め、より具体的な生産メカニズムを解明しようとする動きがある。先王朝と初期王朝間で副葬品としての価値が変化する研究も行われており、興味深い。初期王朝時代という初期国家社会が成立を迎える重大な局面と並行するように大量生産される石製容器は、当該社会の実像に迫るための鍵となる遺物であることが早くから認識されてきた。そのため、ある程度の研究事例の蓄積はある。しかしながら、そもそもこの大量生産を支えたメカニズムや製作システムの研究についてはようやく端緒についたばかりである。また、副葬品としての社会的機能や価値体系も十分に論じられていない。つまり、石製容器については基礎研究から未だ脱しきれていないのが現状である。

特に、石製容器が副葬品として大量に生産される「必要性」を論じた研究はこれまで皆無である。石製容器の大量生産は時の為政者が何らかの社会的必要性に駆られた中で選択した結果であり、石製容器を利用した支配者側の意図があるはずだ。現状、石製容器の大量生産化現象については「王・中央行政に従属する専業集団の出現」「上位層の経済的機会の増加」という解釈に留まり、国家形成を物質文化から語るための説明要素として引き合いに出されるのみである。石製容器が当時どのような媒体であったのかを明らかにすることで、文明形成・成立期である初期王朝社会の特質を浮き彫りにできる。そして、この問いに答えるためには、生産・流通・消費（副葬）の各段階を再構築し、当時の社会背景とよく対応させながら、総合的に理解しなければいけない。

以上の目的を達成するために、本論では以下の手順により研究を行う。

まず、＜序章＞導入として石製容器に関するこれまでの研究史をまとめたうえで、本論の目的・視点を述べ、＜第1章＞分析・考察の前提となるエジプトの地理的・歴史的環境について概説する。＜第2章＞石製容器の生産・流通のメカニズムの実態と変動を分析し、＜第3章＞副葬品としての社会的機能・価値体系を考察、＜第4章＞それらの結果を別角度から検討するために副葬土器と墓構造について考察する。＜第5章＞さらに、理論的見地から石製容器の動態を把握する。＜終章＞最後に、本論の結論を述べ、続く古王国時代への連続性を論じることで締めくくりとする。本概要書では、第2章から終章についてまとめる。

＜第2章 石製容器生産と流通組織＞

本章では生産・流通メカニズムの全体像とその経時的変化を考察する。これまで石製容器の工房址はほとんど見つかっていないため、遺物自体それ自体から考察する以外ない。その際、生産体制を解明する考古学的分析において、容器サイズの法量分析や製作技法・工程の復元が有効である。サイズと製作技法を分析の両輪として、本章では石製容器生産を再構築する。

分析の結果、第1王朝ではトラバーチン・石灰岩と泥岩、玄武岩・閃緑岩といった石材の性質・硬

度に応じて作り分けられていた。こうした作り分けは製作技法の差異とも一致した。前時期の原王朝時代には石材ごとのサイズ・プロポーションが未分化であったことから、石材の性質・硬度に応じた製作システムが第1王朝の段階で成立したと考えられる。また、この地域分布を確認すると、メンフィス地域首都圏の遺跡ほど大型サイズ且つ遠隔地産石材を保有していた。当該期から政治的集権化および行政システムの確立に伴って、製品流通における序列的な供給システムが遺跡の社会的階層性に基づいて形成されたようである。

大量生産がピークに達する第2王朝頃、石製容器の分布域が拡大するとともに、前時期に北サッカラの大型マスタバ墓群にのみ副葬されていた器形や大型品がバダリ地域などの地方墓地の有力墓へも供給されるようになった。特殊器種も地方墓地に広がり、石製容器の供給システムは遺跡間の政治的・経済的階層性に則した序列的な様相を維持しつつ、面的な拡大を示す。地方あるいは小～中規模クラスの墓地遺跡を構成する地域へ製品を分配する確固たる流通システムが成立したと見るべきであろう。また、この広域流通システムと地方への一定量の供給を可能にしたのは、さらなる大量生産化を支える製作技法の改良であった。製作技法もより迅速な生産を可能となる回転工具の使用が増大し、且つ作りが粗雑化していく。この製作技法の変化に合わせるように、前時期までは東部砂漠産の火成岩類の硬質石材が組成に組み込まれていたが、この時期から姿を消し、石灰岩とトラバーチンといった軟質石材が主体となる。器形も回転工具の圧力に耐えやすい鉢～深鉢類が主に選択され、手動によって穿孔・研磨する浅鉢～皿類は、製作時に労働量が多く破損リスクが高いため、急減する。このように、第2王朝には、より迅速に加工でき、破損リスクの低い器形・石材・技法が選択され、さらなる大量生産が指向された。

第2王朝のこの生産供給面での大幅な変化の背景には、石製容器の社会的機能と係わって、当時の地域間関係や需要面での変化が根底にあることが予期される。

<第3章 石製容器副葬の階層構造と供物儀礼における利用形態>

生産供給面を前章で論じ、第2王朝の大量生産化の進展に伴って、製作システムや流通システムが地方需要の増大によって変化したことを明らかにした。生産の動機はその需要が背後にある。そこで、石製容器の社会的機能や価値体系といった需要面を論じるために、本章ではその副葬構造と儀礼的機能を分析した。具体的には、墓構造から設定した被葬者の階層性と石製容器組成を比較し、その相関関係を確認する。そして、当時の供物儀礼の「規範」あるいは「範型」であった葬送用ステラの内容との比較も通じて、石製容器を利用した具体的な儀礼行為を復元する。この初期王朝時代の変化を捉えることで、前節で論じた第2王朝における生産供給面変容の背景を需要面から探る。

墓構造と石製容器組成を比較したところ、第1王朝では被葬者の社会的階層が高位なほど、特殊器種と遠隔地産石材が多く副葬されていた。つまり、石製容器の副葬には階層的な規範が存在していたといえる。北サッカラ・大型マスタバ墓群やウナム・エル＝カアブといった当時の支配者層の墓には、他の墓地からは出土しない特殊器種や多くの遠隔地産石材製容器が副葬されていた。この両墓域を頂点として、メンフィス地域の上位層墓から下位層墓にかけて、特殊器種と遠隔地産石材製容器が明瞭に減じていく。基本的に第2王朝でもこの様相は認められ、さらに地方遺跡でも首都圏域と同じよう

な階層規範が構築されていた。このことから、石製容器は、副葬時の共通儀礼を普及させ、集団間・地域間を儀礼的に結び、さらにエジプト全土の社会を為政者を頂点とした位階的文脈に参与させるための戦略的・象徴的な資源として動員されていたと考えられる。

次に、この共通儀礼の具体像を探るために、当時の供物や副葬品の規範を描いた葬送用ステラの内容を精査し、石製容器組成と比較検討した。すると、ステラ上から円筒形壺と無把手壺、双耳壺がオイル・軟膏の容器としてそれぞれ相対的な価値が設定されていたことがわかり、且つ被葬者の階層性に沿ってその「等級」の副葬が遵守されていた。さらに、第2王朝後半～第3王朝初頭の地方墓地の最上位層墓から出土する石製容器組成は、ステラの儀礼リスト上で描かれる容器セットと極めて類似している。儀礼リストは形式的な食事に入る前の食前儀礼を表現していることから、石製容器のセットは供物儀礼の行為そのものを再現したものであったと想定できる。また、石製容器および銅製容器を食前儀礼を表象する器物と定義づけるために、もともと副葬土器として一般的であった円筒形壺の生産を瓦解させた可能性がある。こうして当該期に円筒形壺が石製容器のみに限定されたことで、儀礼リスト上部の「食前儀礼」を示す儀礼用容器群は自ずと石製容器と一部銅製容器が実際の組成となる。供物儀礼を新たに構築し、その副葬における実践を管掌するために、もともと存続していた円筒形土器の供給システムを停止する。儀礼用容器セットの配布の担い手もまた中央行政であったことを勘案すると、土器生産・流通をも改変することによって、供物儀礼を生産レベルから管理統括したのである。葬送用ステラはメンフィス地域からのみ出土するため、石製容器の配布によって首都圏域で創出された供物儀礼を地方社会にも普及させようとする為政者側の戦略が垣間見える。

以上のように石製容器は供物儀礼の媒体として配布されていたが、それは王権の再生産を担う祝祭・葬祭を契機として実施されていたと考えられる。というのも、同時代の図像資料や葬送周壁および初期神殿などの遺構、祝祭を記念した石製容器、古王国時代の壁画資料は、石製容器が祝祭・葬祭に乗じて生産・配布されていたことを物語る。第3王朝のネチェリケトの階段ピラミッド出土のカセケムイのセド祭等を記念する銘文が刻まれた石製容器が大量の無銘の容器と共伴することからも、その蓋然性は高い。祝祭・葬祭の国家的な儀礼イベント且つ「事業」に組み込まれていたからこそ石製容器は威信を保有し、配布先の受領者側はそれを了解することがおそらくできた。このように、石製容器は初期王朝社会において為政者がもつ一種の戦略的媒体であって、王の威信・権力を再生産した器物であっただろう。

以上の石製容器の動態をより具体的な社会的文脈に乗せるためには、中心地であったメンフィスおよびティスの版図がどの程度の範囲であり、どう拡大していったのかを別角度から明らかにする必要がある。

<第4章 石製容器大量生産化の背景>

前章まで得られた知見を別角度から考察し、且つより具体的な社会背景と比較すべく、副葬土器および墓構造から領域形成と地方組織化のプロセスを再検討する。

その結果、原王朝時代では上・中エジプト地域で先王朝時代の伝統的器形群を保持しつつ、デルタ地帯を含む下エジプト地域では諸遺跡が分散傾向にあった。しかし第1王朝になると、この地勢的・

伝統的な地域性の論理は解体され、「メンフィスーティス領域」が形成される。このクラスタの形成要因はワイン壺と「儀礼用土器群」の有無あるいは多寡であった。続く第2王朝では、当該領域が地方を取り込む形でさらに地域間の副葬土器組成が集約していく。

この変容の背景にあるのは、御料地の設立と再分配システムの形成が地域的ネットワークの構造化を促し、物資や人員、情報を伝達する経路が明確に規定されるようになったことにある。原王朝の段階では、未だ政治的・経済的コントロールが上下エジプトを通貫する形で成立していなかったため、副葬土器の選択性も南北で異なる様相を呈していたのだろう。また、土器副葬において新たな儀礼上の選択性が導入され、行政ネットワークを介してその情報・概念が共有されていたと考えられる。副葬土器の地域性の動態は、地方組織化を推進する統一王朝による越境的システムの構築と政治的な核地域の形成といった領域形成の初動を如実に表す。

また、第2王朝の儀礼用土器および階段付属墓の普及は、中央の葬制が地方社会にも拡散していく様相を物語っている。石製容器の配布も同様の文脈で理解することができ、為政者が「統合儀礼」を行って地方社会を取り込んでいく結果であったと考えられる。

<第5章 エジプト初期国家形成過程における支配戦略の変動>

第1～2王朝にかけて、大量生産指向の体制が不断に整備されていく。さらに、第1王朝ではそれまでの地勢的地域間関係の論理が瓦解し、政治的・経済的な支配領域の拡大へと歩を進め、第2王朝になると地方組織化が進行する。これまでの議論から、石製容器生産と為政者による支配領域維持・拡大の戦略は不可分な関係にあった様子が見えてくる。本章では、主に二元プロセス理論から初期王朝社会の支配戦略を理解し、石製容器がその際にどのような媒体であったのか考える。

先王朝時代から支配戦略の変動を追ってみると、まずI～IIA-B期では威信財を巡る地域内・間の競合関係が一部認められるものの、マハスナやヒエラコンポリスが例証するように、イデオロギーこそが当該エリート集団最大の権力資源であった。共同体の内的指向の協同型戦略の下で集団統治が図られていたといえる。しかし、IIC-D期からは、地域・政体間の競合関係の下で発達した交易ネットワークによる外的指向のネットワーク型戦略への依存へと変貌する。不断にその交易権の独占と輸入品の掌握を目指して北上していく過程で、文化的な統合が行われていった。IIIA-B期では、南レヴァントや下ヌビアとの交易が活発化し、ネットワーク型戦略はより広域となる。ただし、結果として領域は広範なものとなり、情報処理や意思決定の複雑性が増大した。そこで採用されたポリティカル・エコノミー上の戦略が、御料地の設立と再分配システムの行政ネットワーク化である。領域拡大過程において生じた問題と文字システムの導入の2つが契機となって、必然的にそうした支配戦略を採用するに至ったのである。初期国家が開くIIIC-D期には、多様な権力資源を上手く祝祭・葬祭イベントに集約・統合することで協同型戦略に埋め込まれた形でネットワーク型戦略を展開する。この埋め込まれたネットワーク型戦略の主な媒体であったのが石製容器であった。そしてこれによって首都圏域と地方社会の間に儀礼的中心－周辺関係を構築する。為政者たちは、そうした支配戦略をエジプト全土規模で展開することによって、拡大した領域、複雑化と増大の一途を辿る情報処理や意思決定、中央行政と地方社会の組織化という問題に対応したのである。

IIA-B 期のヒエラコンポリスやマハスナにおける季節的に周期する氾濫に係る祭 (Inundation Festival)、いわば協同型戦略を領域規模で展開し得たことが初期王朝社会で達成した新しい戦略であり、石製容器はそのイベントでの返礼あるいは威信財として機能した新しい媒体・資源であったと言える。

<終章>

以上のように、石製容器生産は初期王朝時代を通して大量生産化の一途を辿り、それを可能にするための高度に発達した製作システムが不断に整備されていった。各地での需要増に対して、より迅速な製作技法や器形・石材が選択され、大量生産メカニズムが構築されたのである。また、中央から地方へ供給し、さらに被葬者の社会経済的階層に併せて配布する序列的供給システムと副葬の階層規範が形成された。この第2王朝における需要増は、中央で生産された石製容器を地方社会にも積極的に配布しようとした結果である。社会階層に応じて石製容器副葬に一定の階層規範を設けるだけでなく、石製容器は供物儀礼の儀礼行為それ自体を表象する媒体であったことから、地方社会に対して中央で創出された共通儀礼を奨励・促進しようとした為政者側の戦略がその背景にあった。

当時、王族や中央行政がコントロールできる版図は限定的であったため、領域形成や地方組織化の問題は為政者にとって常に直面していた。副葬土器や墓構造からも検証したように、初期王朝時代を通じて、首都圏域内および地方社会は儀礼や葬制が共有されていく。石製容器生産は、こうした統合儀礼と同じような文脈で理解することができる。初期王朝時代は、行政システムによる物資・情報流通のネットワーク化を前提とした祝祭・葬祭イベントを協同型戦略の核として地方組織化を進めていたが、石製容器はその際、ネットワーク型戦略の媒体として埋め込まれていた。これによって、エジプト全土において儀礼的中心一周辺関係を構築し得たのである。

石製容器はこのように、当時の支配戦略上、為政者によって有用な物質的媒体として選択された器物であった。だからこそ、国家社会を建設しようとする為政者はこうした戦略的器物であった石製容器を大量に生産したのである。ただし、この結論は時の為政者の野心的行為を定点としたものである。ここではさらに、為政者の意図という行為を分離し、石製容器それ自体を行為主体としてのモノ (Material Agency) という視点に立脚して理解することで、石製容器がこの時期に選択された「必然性」を浮き彫りにしたい。

石製容器は第2王朝になると、供物儀礼における食前儀礼の行為を表象するセットとして性格づけられる。ただし、これは原王朝に飲食容器としての性格が付与され、第1王朝で強化されたことが前提条件であった。逆にいえば、こうした石製容器に対する価値や認識の蓄積と性格の形成も存在しえなければ、石製容器は戦略的媒体として選択されることはなかったかもしれない。それによって初めて、第2王朝に食前儀礼という行為の場 (Field of Action) を形成し得たのである。そもそも原材料を管理統括しやすいという物質的条件が内在していたことから、為政者が戦略的に利用することができた。このように考えることで、為政者が完全に主体となって選択・形成したというよりも、石製容器が歴史的に内在させてきた価値と機能が前提となっていたことがわかる。その行為主体 (Agency) としての石製容器は、それまでに培われた実践のあり方に基づくものであり、歴史的に形成されてきたので

ある。

以上のように、石製容器は初期王朝社会の為政者たちの支配戦略に埋め込まれた資源であった。時代を経て変化する状況に合わせて、新しい「釣り合い」を求めて為政者は先王朝時代以来、新しい戦略を創出し続けてきた。初期王朝時代の石製容器を媒介項とした広域性協同型戦略は、形を変えて、古王国時代以降も古代エジプト文明の力学として連続していく。